

東京国立博物館 庭園散策MAP



皆様へのお願い

- 庭園は全面禁煙です。
- 茶室には入らないでください。
また、屋根にご注意ください。
- 動植物を採取しないでください。
- 池には近づかないでください。
- カラスにご注意ください。
- 緑地内には入らないでください。
- 車いすでも散策可能ですが、
一部通行できないところや、
通行しづらい箇所があります。
- 当館職員の指示に必ず
従ってください。

※注記のない桜は主にソメイヨシノです。
※天候や整備作業等により、
閉鎖もしくは散策エリアを
制限する場合がございます。

東京国立博物館の庭園

東京国立博物館の敷地は、もとは寛永寺の境内でした。現在本館が立っているところが寛永寺の本坊にあたり、本館北側に広がる庭園は寛永寺の庭であったと考えられます。ただし、庭は何度も改修を重ねており、5棟の茶室なども移築されたもので、当時の面影を残しているのは、本館東側の築山と中央の池のごく一部、そして庭の一角の古い墓石のみです。
また、当館には創設当初「天産部」があったため、多種多様な植物があることも、この庭園の特徴です。

庭園入口

庭園入口

東洋館

庭園内茶室と文化財などのご案内

1 五重塔



高さ5.7mの銅製の塔。最上部の相輪には龍が絡み付き、垂木、斗拱の組み物の細部まで入念に作られています。基壇に第5代将軍徳川綱吉(1646～1709)が法隆寺に奉納した旨の銘文「大和国法隆寺元禄元年十二月日常憲院徳川綱吉」が線刻されています。綱吉の存命中に、院号と俗名を併記することは一般的にないため、没後奉納時の年号と施主の銘文が書き加えられたのでしょう。

2 第二回内国勲業博覧会の碑



明治政府は勲業政策の一環として博覧会を開催、その第一回から第三回の会場が上野公園でした。明治10年(1877)の第一回博覧会では、本館北側のバルコニーのあたりに、日本で初めて美術館という名の煉瓦造りの建物が建てられました。この美術館の前面にジョサイア・コンドル(イギリス 1852～1920)設計の博物館旧本館が建てられ、明治14年の第二回内国勲業博覧会で使用されました。第一回は会期102日、入場者数は45万人を超え、第二回は会期122日、入場者数は82万人に上りました。博覧会は産業の振興におおいに役立っただけでなく、美術作品の出品も多く美術の振興にも寄与しました。ちなみに、博覧会への出品物は特別に購入予算が計上されて博物館に買い上げられており、現在も明治期の工芸コレクションの重要な一部になっています。当館に碑が残っているのは、この第二回のみです。

3 春草廬



江戸時代、河村瑞賢(1618～1699)が淀川改修工事の際に建てた休憩所で、その後大阪へ、さらに横浜の三溪園に移築され、昭和12年(1937)に埼玉県所沢市にある松永安左工門(耳庵・1875～1971)の柳瀬荘内に移築されました。昭和23年(1948)に柳瀬荘が当館に寄贈されて、昭和34年(1959)春草廬は現在の位置に移されました。入母屋の妻に掲げられた「春草廬」の扁額は、能書家として知られる曼殊院良尚法親王(1622～1693)の筆で、原三溪(1863～1939)が耳庵に贈ったものです。木造平屋建て、入母屋造、茅葺き、座敷は5畳と3畳からなります。

4 町田久成の碑



初代博物館長(館長)町田久成(1838～1897)の顕彰碑です。町田久成は天保9年(1838)薩摩(現在の鹿児島県)に生まれました。19歳で江戸に出て学び、慶応元年(1865)に渡英、大英博物館などを訪れ日本での博物館創設を志し、帰国後初代博物館長として日本の博物館の基礎を築きました。文化財調査や保護を提唱し、自らの財産を投げうって古美術品を買い求め文化財の散逸を防ぐことにも尽力しました。明治15年(1882)に退職、仏門に入り、明治30年(1897)9月15日上野で没しました。寛永寺津梁院に墓があります。

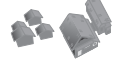
5 転台庵



小堀遠州(1579～1647)が桂宮から茶入「於大名」を賜った折、その披露のために京都伏見の六地藏に建てた茶室です。その後大原の寂光院に移築され、昭和38年(1963)当館に茶入とともに寄贈されて現在の位置に移されました。木造平屋建て、切妻屋根、瓦葺き、二畳台目向切席、遠州好み。四畳半座敷、水屋などがあります。

※転台庵の脇の四角い土壇は、重要文化財の旧十輪院宝蔵(校倉)が建てられていた跡です。現在は、法隆寺宝物館の脇に移され、一般に公開されています。

6 六窓庵



慶安年間(1648～1652)奈良の興福寺慈恩院に建てられたもので、現在奈良国立博物館にある八窓庵などとともに大和の三茶室といわれました。明治8年(1875)に博物館が購入、明治10年(1877)当館に移築されました。その後、第二次大戦中に解体されましたが、昭和22年(1947)9月数寄屋の名工木村清兵衛により現在の位置に再建されました。入母屋造、茅葺きで席は三畳台目出炉、金森宗和(1584～1656)好み。水屋、寄付、腰掛などは明治14年(1881)に古筆す仲によって設計、増築されたものです。にじり口にある手水鉢は四方仏水盤といわれる形式のもので、延長3年(925)関白藤原忠平が建立した法性寺(山城国)の石塔のひとつでした。その後、銀閣寺を経て所有者が幾人か替わり、明治18年(1885)に当館の所有になりました。

7 有馬家の墓石



寛永寺の面影を今に伝える越前藩主有馬家の墓石。記録には明治15年(1882)から19年(1886)にかけて、公園として整備するために博物館敷地内の墓所が整理されたとあります。なぜこれらの墓だけがここに残されたのかはわかっていません。

8 応挙館



尾張国(現在の愛知県)の天台宗寺院、明眼院の書院として寛保2年(1742)に建てられ、後に東京品川の益田孝(鈍翁・1848～1938)邸内に移築、昭和8年(1933)当館に寄贈され、現在の位置に移されました。室内に描かれている墨画は、天明4年(1784)、円山応挙(1733～1795)が明眼院に眼病で滞留していた際に揮毫したものであると伝えられています。松竹梅を描いた床張付と襖絵が残されています。墨画は保存上の理由から収蔵庫で保管されていますが、2007年、最新のデジタル画像処理技術と印刷技術を駆使した複製の障壁画が設置され、応挙揮毫当時の絵画空間が応挙館に再現されました。木造平屋建て、入母屋造、瓦葺き、間口15m、奥行き9m、2室、廻り廊下を巡らしています。

9 九条館



もと東京赤坂の九条邸にあった建築で、当主の居室として使われていました。昭和9年(1934)九条家から寄贈され、現在の位置に移築されました。床張付などには狩野派の筆と伝えられている楼閣山水図が描かれており、欄間にはカリンの一枚板に藤花菱が透かし彫りされています。木造平屋建て、瓦葺き、寄棟造、間口15m、奥行き10m、2室、廻り廊下を巡らしています。

10 大燈籠



京都で現在も代々続く陶家・清水六兵衛家の四代(1848-1920)の作です。四代が61歳のときに作り、昭和13年(1938)に五代によって当館に寄贈されました。陶製の燈籠という、器にとどまらない四代の作風の幅の広さを伝えるものとして、大変貴重な作例です。総高は、2メートル30センチ強。宝珠、傘、火袋、中台、竿、基礎部、の大きく6つの部分から成り、総重量は1トンを超える、大変堂々とした作品です。

11 鉄燈籠



石の台に据えられた鉄製の燈籠。火袋は松皮菱を透かし、竿には雲龍文を鋳出しています。しかし、鉄製のため錆が著しく付き、昭和57年(1982)1月の台風で、竿から上が倒壊し、現在各部は別に保管しています。今は基壇だけが、そのままの状態でおかれています。銘文はありませんが、作者は茶の湯釜師として有名な江戸名越家の6代目、名越建福(1819没)と伝えています。

※ 茶会等で使用中の茶室はご覧いただけません。

※ 茶室ご利用案内

茶室は茶会、句会等さまざまな催しにご利用いただけます(有料)。ご利用、お申し込みについてのお問い合わせは、東京国立博物館総務課施設貸出担当 TEL03-3822-1111(代表)までお願いします。(土・日曜日及び祝休日、年末年始を除く9:30～17:00)